

年頭所感 2011年(平成23年)



日本医師会

会長

原中 勝征



新年明けましておめでとございます。皆様におかれましては、健やかに新年をお迎えになられましたことと、お慶び申し上げます。

さて、新執行部が4月に発足してから9ヶ月が過ぎました。この間、皆様の温かいご支援と深いご理解のおかげで、国民医療の改善と我が国の医療制度の未来に向けての行動を始めることが出来ました。長年続いた医療費抑制政策により引き起こされた地域医療の崩壊により、医

療の現場は荒廃の危機にさらされています。ご承知のように自由経済の我が国において、医療をはじめとする社会保障制度は相互扶助を基盤とした制度になっております。したがって、この荒廃した地域医療のおかれた環境の修復には公的医療保険への公的財源の投入なくしては不可能であります。

医師は、人の命を苦痛から救う聖職であります。しかしながら、市場経済を中心とした米国の医療では、保険会社によって経済的視点から医療内容が指示されることから、日常的にあると言われていることです。

国際的にみると日本は廉価な医療費ですべての人が望んでいる健康長寿を達成しました。インフルエンザ流行時にも最

小限の死者数にとどめました。これは我が国の国民皆保険制度が大きな役割を發揮したよい例だと思います。

厳しい時代であるからこそ、我が国の英知を結集し、我が国にふさわしい医療制度の再構築に向かわなければなりません。そのためにも、医療費削減のために医師を悪人と決めつけるような指導・監査の制度や、病院勤務医と診療所医師を分断するような政策を改め、また、現場を熟知していない学者などによる審議会等の在り方を見直し、本場に現場からの声を聞き、共に苦労を分かち合いながら国民を守る政治に、変える必要があります。

一方、私たち医師も医道倫理と学術に基づいた医療を行い、医学教育、医師不

足、医師の診療科と地域の偏在、専門医の在り方、臨床研修制度、女性医師の職場復帰、基礎医学者の不足、医師の労働環境、医療事故調査、医療監査・指導の在り方、消費税や事業税、療養病床や有床診療所の在り方の問題などを克服し、国民医療を守らなければなりません。

2055年には人口が今より約4000万人減少し、65歳以上の人口が労働人口とほぼ同一になると言われております。すべての医師が医師会に入会し、都道府県行政を基本とした知事と都道府県医師会が地域の実情にあった医療と介護の制度を策定し、国民が安心して生涯を送れる日本を作り上げなければならないと考えます。

新年が明るい未来の礎の年になりますことを祈り、合わせて皆様のご多幸の年になりますことをお祈り申し上げます。

日本歯科医師会

会長
大久保満男



芸術という言葉が大きな意味を持って登場したのは、よく知られているように、近代を迎えてからのことだ。もちろんだからといって、芸術的な行為が存在しなかったというわけではない。近代以前の偉大な天才を持ち出すまでもなく、美術も演劇も文学も音楽も、人類の大きな遺産として、今のわれわれの現前にある。あのアンドレ・マルローがフランス初代文化大臣に任命されたその記念すべき国演説で、「文化とは死にあつてもなお生なるものに他ならない」と述べたのは、そのことを意味している。では、いったい、近代以後の、つまり我々が芸術と呼

ぶものと、それ以前のものの違いはなんなのか。どこを持って画然と分ける線を引くのか。ことはそう簡単ではない、と私は思う。実はこんなふうにすぐに区別をつけることそのものが、近代の生んだ人間の癖とでもいふべき行為なのだが、それについてここでは触れない。

芸術を近代以前と以後とで分かť最大の線は、個という意識の誕生である。これを近代による自我の誕生と呼ぶことはよく知られている。この、もはや何者にも分割されることのない、他の誰をもつても替えることのできない自我としての個が最もよく表現されるのが、芸術だと思ふ。その証拠に、これは近代以降の芸術に最も強く求められるオリジナリテイーという言葉に表れている。これは、他の模倣ではなく、自分自身だけの表現という意味だが、これがいつのまにか今まで存在しなかった表現ということに転換

し、表現者は全く未知の手法を求めて際限のない表現の旅にでることとなった。たとえば、カンバスの地を一度で塗って、その一部を切って切り口を見せるフォンタナのように。しかしそのような表現は、一度見てしまえば、二度目からは、そのカンバスの地色がどう違っても、切り口の位置や長さが違っても、最初に見た衝撃はどんどん遠ざかっていく。

美術は視覚の芸術だといわれる。音楽が聴覚の芸術といわれるように。われわれの網膜に映って意識される視覚は、常に流れて消えていく。しかし、視覚としての芸術である美術は、それが表された「もの」が消失しない限り、どんな過去のものであれ、われわれの現前にある。例えば、アルタミラの洞窟画やアッシジのジョットの壁画や平家納経のように。これをフランス初代文化大臣としての国会演説でアンドレ・マルローが述べた「文

化とは死のなかにあっても生なるもの。他ならない」ということだろう。しかし、「もの」として時代を超えて残る美術は、それゆえに「もの」の質・種類に拘り続けた歴史だといってもいい。先ほどのフォンタナの絵画の衝撃は、何かを描くためのカンバスの一部を切りその裏側を見せることで、脇役のカンバスを主役にしてしまったことと同時に、さらに大きな意味は、平面のカンバスの切り口の向こうの世界を見せたことだ。

よく知られているように、平面としての絵画が写し取る対象は、人であれ自然の景色であれ、そこには奥行きが存在する。つまりこの「もの」同士の間隔を平面に表すために、表現者は色彩としての影をつけ、さらに遠近法を発見し、何とか平面上に立体を現そうと努力してきた。この世に存在する具体的なものを、真実として描くための努力といってもい

いだろう。しかし現代美術は、この現実らしさというテクニクを一期に放棄した。そしてそれを可能にしたのが、具体的にある形を描くことを止め、絵画そのものを成立させる要素、つまり線とそれによって出来る形と色を自由に組み合わせた抽象絵画といわれる領域に一気に踏み込んでいく。それは実に多様な表現を生み出したが、冒頭に述べたように、他の誰でもない自分の表現というオリジナリティーを求めて、際限のない旅にでってしまった。今もその旅は続き、多くの現代美術の表現者は、初めての表現という名の自己のあり方を求めて苦闘している。私は、絵を描くことも石を彫ることもしない。ただただ、その周囲に居ること、見続けることに徹していたいと考えてきた。表現者が幻視の果てに生まれるものを求めるように、私もまた幻の作品を探し続けることができたらと願いつつ。

日本薬剤師会

会長
児玉 孝



新年明けましておめでとうございます。皆様におかれましては、心新たに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。旧年中は、政局混乱の中、国政選挙へのご支援を賜りましたこと、また、薬学教育6年制における初めての実務実習に關しまして、ご理解・協力いただきましたこと、役員一同心より感謝申し上げます。

さて、日本薬剤師会は、数年前より、薬学教育6年制を修了した薬剤師が社会に出てくるに当たり、彼らを失望させてはならないという思いをもって、様々な事業に取り組んで参りました。いよいよ

来年4月がその時となります。本年はまさに、様々な課題に目処をつけなければなりません。その主な課題は以下のとおりです。

「組織づくり」↓公益法人制度改革
「人づくり」↓生涯学習体制の整備等
「城づくり」↓日本薬剤師会館（仮称）の建設

「目標づくり」↓薬剤師の将来ビジョン策定等

さらに、本年に予想される以下の重要課題を乗り越えなければなりません。

①改正薬事法に係る医薬品販売制度の経過措置終了への対応

②診療報酬・介護報酬同時改定への対応

③規制・制度改革への対応

④チーム医療問題への対応

⑤6年制薬剤師の処遇問題 等

いずれにせよ、本年は混乱する政治状況の中、しっかりと地に足をつけて、全

ての薬剤師、薬剤師会とともに、少し大げさかもしれませんが、“覚悟”の年としなければならぬと考えています。「百の言葉より一つの行動」です。今年が卯年です。その跳躍力を生かして“飛躍の年”となりますことを祈念申し上げます。新年の挨拶とさせていただきます。

東京都医師会

会長
鈴木 聡男



明けましておめでとうございます。

日本医家芸術クラブの皆様方には、健康で新年を迎えられたことと心よりお慶び申し上げます。日頃は本会の運営に深いご理解とご支援を賜り深く感謝申し上げます。

日本医家芸術クラブの先生方のご支援

とご協力があるからこそ、多くの医療にかかわる提言を行い、実行に移すことが出来るものと考えております。

さて、ご高承のとおり、昨年から今年にかけても医療を取り巻く環境はどの局面を見ても、決して改善されているとは言えません。一昨年の新型インフルエンザの流行やそれに伴うワクチン接種の課題、救急医療、在宅ケアなど、それぞれに多くの問題点が残されておりますが、それをひとつの契機として多くの医療関係者が連携し、その中から対応策を模索していく。つまりどのような問題点も、そのマイナス面に影響されるのではなく、むしろ、そこから解決策を見出して前進していくことが大切であると感しております。

東京都医師会の活動の中で最も重要な点は、医療、介護、保健のあらゆる面で、常に都民のことを第一に考えることであ

ると信じております。都民がそれぞれの地域で健康的な生活を送ることができ、もし療養が必要となった場合も安心して切れ目のない医療が受けられる。これこそ医師会の最大のテーマであります。

都民が医療について不安に感じる要因の一つに、医療情報の入手の難しさなどがあります。切れ目のない医療を目指していくには、時間と場所を問わず情報が入手でき、またそれを実際に活用していくことが重要であります。

しかしながら、急性期、回復期、慢性期の流れを、個人が自分で情報を得て的確に判断し対応することは大変困難なことであります。

今後必要なことは、都民がかかりつけ医との対話を通じて情報を得、治療内容の方針の選択・決定に参加し、自分の生き方に沿った療養生活を送ることができ、そのような基盤作りの整備であります。公

的、私的な機関でも一ヶ所で、場所、時間にとらわれずに情報を得て連続した医療サービスを受けることができる、いわゆるワンストップサービスのような状況を作り上げることは、これまでのいくつかの例から見ても十分に可能であると考えております。

私ども東京都医師会は、本年も都民の皆様方の健康を第一に考え、助け合い、支え合う社会、親切なところ、思いやりのある態度などを基盤とする社会を目指して活動してまいりますので、日本医家芸術クラブの会員の皆様方におかれましても、倍旧のご支援、ご協力を切にお願い申し上げます。

終わりに日本医家芸術クラブの限りないご発展と各位のご清祥を祈念して新年のご挨拶とさせていただきます。